

お一人サマじゃいけない!?

Megumi & Youbei

丹羽庭子

Niwako Niwa

termity



エタニティ文庫

もくじ

お一人サマじゃいけない!? 5

書き下ろし番外編
約束の証^{あかし} 337

お一人さまじゃられない!?

幼い頃から、私、まきやまめぐみ 葺山恵は整った顔立ちをしていた——らしい。

両親も、きょうだいも、祖父母も……みんな、割と派手めの美形の部類に入るようで、親類の間では珍しくもなんともない。

だけど、はっきりした眉、クリッとした大きな目、筋の通った鼻、肉厚の唇——は、周りの子達と比べるとやはり浮く。

……もつと薄い顔に生まれたかったな。

そのうえ髪色は茶系で、緩いパーマがかかったような髪質。学校をあがるたびに、髪を染めていないという証明書を提出するのが、面倒くさくて仕方ない。

第二次性徴期になると、体は驚くほど変化した。胸は鬱陶うつとうしいほど膨らみ、腰は折れそうなほど細くなり、お尻はコンパクトにまとまり、足はよきによきと伸びた。

大都市でもないのに、芸能関係の人からスカウトされるようになったのもこの頃。芸能界なんて全く興味がなかったから、ひどく煩わづわしかった。

「恵ー、芸能事務所の人から電話よー」

「興味ないし学業優先、って言うておいてー」

自宅にも芸能関係の人が電話をしてくることがある。断ると、「じゃあお姉さんは？」となり、「お兄さんは？」「弟さんは？」とすりかえられ、最終的にはこちらから父をモデルに推薦して諦めてもらうなど、断るにも一苦労だった。

そもそも私は、手芸や料理などが趣味で、家の中で過ごすのが大好きな地味な性格なのだ。

ちなみに趣味の手芸といっても、穴の開いた靴下を繕つくろったり、古くなつてボロボロになったタオルを雑巾にしたり、激安衣料品店で買った服に刺繡ししゅうをしてリメイクするなど、趣味と実益を兼ねたものである。

母親は、私を含めて四人の子供をもうけたけれど、私が中学一年生になったとき、他界した。

父親の給料だけでは家計がかなり苦しかったので、兄と姉は高校生になると、それぞれ無理のない程度にバイトをするようになった。

当時中学生だった私は、バイトするわけにもいかず、亡くなった母の代わりに家事を担当した。暇を見つけては家庭菜園にいそしみ、縫ぬい物をし、編み物もする。

手ずから作り上げた野菜や小物は、なによりも愛おしかった。誕生日にミシンをブレ

ゼントされたときには、飛び上がって喜んだものだ。

家族は外出が苦手な私を最初は心配していたけれど、家事や趣味の手芸をして生き生きと家の中で過ごしている姿を見て安心したのか、好きにさせてくれた。

時は流れ、私は二十七歳になった。現在は、通勤の関係で一人暮らし。昔の生活が身に染みついているせいも、充分なお給料をもらっているにもかかわらず、いまでもギリギリの節約生活をしている。毎月確実に増えていく通帳の残高を見るのが唯一の楽しみ……かも。

友人いわく、糠床ぬかどを日々手入れしていたり、裁縫に精を出したりしている私は『昭和のオカン』なのだそう。なるほど、上手いことを言う。……と感心している場合ではない。二十七歳のアラサーとしては、老後を視野に入れた生活設計を立てなければいけない。

男遊びが激しく、派手な生活をしていそうな見てくれだけど、キスすら経験したことのない干からびた女である。結婚など想像もできない。だから『お一人サマ』の人生を歩むため、常日頃から節約を心がけているのだ。

ケバい外見と相反する性格の私は、色々とストレスを感じることも多い。しかし、愚痴ぐちは家族以外には零こぼせなかつた。なぜなら、私に対する周りの視線は好意的なものではないことの方が多かつたから――

* * *

「ねえねえ、蒔山さんって知ってる!？」

……聞こえているんですけどねー。

弁当を食べ終わったあと、噂話が背後から聞こえてきて、私はこの場から立ち去るタイミングを完全に逃した。

ここはオフィスビルの十八階にある社員食堂。美味しくて割安な食事が取れるということ、いつも大混雑している。

この食堂のコンセプトは『田舎のおふくろの味』。そのため、店員さんの制服は白い三角巾に白の割烹着かっぽじぎだ。マスクをしているので、少し表情は見えづらけれど、みんな毎日楽しそうに仕事をしているから、ここに来ると仕事の疲れが取れる気がする。

更に嬉しいのが、味噌汁とお茶がサービスでもらえることだ。弁当の持ちこみも認められているので、熱々の味噌汁を飲みながら、お弁当を食べられるのがありがたい。最上階なので見晴らしも最高だ。

暗黙の了解で、弁当持ちこみ組は食堂の端に固まるのだけれど、今日は食堂に来るのが遅かつたせいか混んでいて、中心の賑にぎやかな席に座ることになってしまった。

「あの人？ 見るからに『私って綺麗でしょ？』って自信満々そうなの」
 「そうそう！ 超美人で一度見たら忘れられない強烈な人！」
 「蒔山さんって、私も聞いたことある。あの——結構遊んでいる感じの？」
 「実際モテモテだからね。振られた男は星の数、蒔山さんは選り放題って……羨ましい限りだよ」

……その、蒔山、ですけど……私。

笑えない状況に、ぬるくなつたお茶をひたすら時間をかけてちびちび飲む。噂話には慣れっただけど、このタイミグで席を立つなんてお互いのためによろしくない。

「蒔山恵、えーと確か二十七歳。地元大学卒で一人暮らし、だったかな。現在彼氏はいない……と自分では言っているけど、実際のところはどうかしらね」

「彼氏はいないけど、都合のいい男はいるとか？」

「あー、いそう！ だって、すごい派手だもんね」

「スタイル維持のためにお金かけてそうだし」

……ますます出て行きにくいんですけど。

小さくなりながら、なるべく気配を消し、唇を湿らす程度に、残り少ないお茶を口元に運ぶ。

背後に在るうちの一人の声に、聞き覚えがある。後輩の城之内さゆり……かな。だと

すると、一緒にいるのは彼女の取り巻きと、いつかの合コンで一緒になつた子かもしれない。二つ三つ年下の彼女たちは、私に気づくことなく噂話に夢中だ。

「じゃあ結構、修羅場とか多くない？ 蒔山さんを巡って、とか」

「プライベートってあんまり知らないのよね。でもさ、合コンするとき、スペックの高い男を呼ぶにはいい餌になるみたい」

「あー……まあそうだろうね。彼女みたいな女を連れてたら、男にとつてはステータスになるだろうし、そりゃ可能性があつたら参加したいもんね」

「ま、そのおこぼれって言っちゃ身も蓋もないんだけど、おかげで私達にも、いい男をゲットするチャンスがあるわけよ」

ここで、彼女達が声を潜めて周囲に聞こえないようにする気配を感じた。……まあ、私にはバツチり聞こえちゃっているんだけど。

「えー、でもさ、その蒔山さんの一人勝ちってことになるんじゃないの？」

「大丈夫。そこは蒔山さんとの約束があるから」

「約束って？」

「もうちょっと近寄って。それは——」

いよいよ声が小さくなり、そこから先はさすがに聞こえなくなった。なにを言っているかは、大体察しがつくけれど。

湯呑みはどうとう空っぽになつてしまい、弁当箱を包んだ布を綺麗に結び直したり、メールの着信を確かめたりして居心地の悪い時間を過ごす。

「——というわけ。じゃあまたメールするね」
「りょかい。楽しみだわ」

私の後ろにいた女子社員達は、ガタガタと音を立てて椅子から立ち上がると、ようやく食堂から出て行った。

な、長かった……わ……

強張らせていた背中がガチガチに凝り固まつていた。ふーつと深呼吸をして肩をほぐす。

念には念を入れて、たつぷり百を数えたあと椅子から立ち上がった。弁当箱を小さなバッグに入れて肘から提げ、味噌汁の椀と湯呑みを載せたトレイを返却口に持っていく。「お願いしまーす」

洗い場にいる従業員に声をかけ、出口に向かう。調理場の前を通るときにも「ごちそうさまでした」と声をかけてにつこり笑った。すると、マスクをしたおばちゃんが私に向かって手を振る。

「次の月曜日は蒔山さんの好きなワカメと筍の味噌汁だよ！ 楽しみにしてな〜」

「わ、嬉しい！ ありがとうございます」

自分の父親と同じくらいの年齢のおばちゃんとは、入社当初から料理のレシピを教えてもらったりして仲よくしている。いまではメニューの味見までさせてもらう関係だ。

さて、と……

食堂を出た私は、このビルの六階にある自分の会社へ戻るため、階段へと足を向けた。このビルの中にいる間は、必ず階段を使うことにしている。会社勤めだと、なかなか運動する機会が得られない。運動をしてスタイルをキープする理由は単純で、太ったから服を新調するなんて不経済だからだ。

六階フロアに着き、廊下を歩いていると、自動販売機コーナーのベンチに座っていた一人の男性がパツと立ち上がり、駆け寄ってきた。

「ま、ま、蒔山さん！」

「はい？ ええと……」

……この人、誰……？

戸惑っていると、目の前に立った男性は頬を紅潮させて、私をまっすぐに見つめた。

「俺と、付き合ってください！」

「えっ」

「先月の合コン以来、蒔山さんのことが忘れられないんです。どうか、お願いしますー！」

「え、えー……」

そうだ、確かにこの人いたわ。でも私は始まって三十分ほどで帰ったので、あまりしゃべらなかつたのに。

私はある理由があつて合コンに参加するだけで、別に彼氏が欲しいわけではない。

こんな容姿をしているから、軽そうな女に見られることが多く、いつからか男の人が苦手になつてしまつたのだ。

けれど、参加すれば、当然こういう事態に陥おちることもある。

「あの……ごめんなさい」

「すみません、突然過ぎましたよね。でも付き合つていくうちに、だんだんわかり合えらると思つてんです。だから——」

ああ、この人は押し強い人だ。

このような場合、どう逃げるかというのと、とにかくごめんなさいと頭を下げるか、急いでいる感を出すか……なんだけど。

「お願いします、蒔山さん。俺は——」

「あつ、蒔山！ 部長が呼んでたよー！」

どう躡かすか迷つていたら、救世主が現れた。

「ありがとうございます、いま行きます！ ……あの、すみません。お付き合いはできません」

救世主に礼を言い、ふたたび男に向き直つて軽くお辞儀をし、足早にその場を立ち去つた。後方からは「俺、諦めませんからね！」などという声が追いかけてきたが、聞かなかつたことにする。

会社のエントランスに入ると、ようやく肩の力が抜けた。ふう……と息をついていたら、救世主に後ろから背中をポンと叩かれた。

「お疲れ、蒔山。なに？ またなの？」

「んー……そう。ありがとう、助かつちやつた」

彼女の名前は、小長井京子。同期入社为数少ない友達だ。京子は面倒見がよくて頼りがいもあつて、そしてなにより決断力がある。

大学在学中に一目惚れした相手と即結婚。即出産。次いで年子を出産。そして二年間休学したものの優秀な成績を残して卒業し、就職も難なくクリアしたという強者だ。

私を外見で判断せず、普通に接してくれる京子は、私にとって本当に貴重なお友達。

最初は同期とはいえ、年上なので敬語で話していたけど、徐々に打ち解け、いまでは下の名前で呼ぶほど仲がいい。京子は私のことを『蒔山』と呼ぶけれど、それは単に私の苗字が好きだから、だそうだ。

会社の廊下を歩き、ロッカールームへ入る。持っていた弁当箱を自分のロッカーにしまいながら、京子にさっきの男について話した。

「私ね、押し強い男性ってどうも苦手だわ。近づかれるだけで、トリハダが立つもの」
 「蒔山はいかにも遊んでいそうな派手な顔立ちをしてるから、押せばなんとかなるって思われるのかもしれないね」

京子は実際のあんたは地味なのにね、とクスクス笑いながらロッカーの扉についた鏡で化粧直しをする。私はそんな彼女を横目で軽く覗む。

「化粧直しができるなんて羨ましいわ。私なんてマスカラ一つ塗っただけで、舞台メイクレベルだもの」

「ケバい顔立ちって難儀ね〜」

口紅を塗っただけで『今日は化粧濃いね』なんて言われてしまうこの顔立ち。弓なりにカーブを描いた濃いめの眉と、マスカラ要らずのクリッとカールしたまつ毛、赤みがかった唇がその原因かと思われる。だから私は基本的に会社以外ではすっぴんだ。

仕事中はアイシャドウやチークを使わず、薄づきのファンデーションにグロスを乗せるだけの最低限のメイクにとどめているのに、それでもまだ派手だと言われる。

仕方ないことだと思いつつ、「あーあ、平安顔に生まれたかった」というぼやきの言葉は止まらない。

「でもさ、蒔山ってば今夜も合コンなんでしょ？ 大丈夫なの？」

「うん、幹事さんがしっかりしてるから大丈夫よ。知ってるでしょ、同じビルに勤めて

る高橋悟さんだよ」

そうそう、どうして私が合コンに呼ばれるのかと言うと……

——客寄せパンダ。

この一言に尽きる。

私が参加すると、男性のレベルが上がるのだそう。それだけの理由だったら断固お断りするんだけれど。

「ああ、高橋さんの会ね。選ばれし者しか参加できないという伝説の合コン。いいなあ、私もそれ行ってみよう」

「なに言ってるの。ダンナさんとラブラブのくせに」

「ふふっ、まあねー」

共働きの京子は、一時間早く終わる残業なしの時間短縮勤務。放課後児童クラブに子供を迎えに行かなければならないからだ。二人とも小学生になったし、楽になって来たんだけどね、と母親らしい顔をのぞかせながらも、「でもダンナってば——」とたびたびノロける。

「蒔山にも、外見だけじゃなくて蒔山の中身が好きなん、ぜったい現れるよ」

「……どうだか」

出会えるわけがない、と半ば諦めている私に、京子は「私は私にびったりな人と出会え

たわよ！」と満面の笑みを浮かべた。

「蒔山、人生なにかあるかわからないから。……そう、この人！と思つたら、突つ走つてみなさいよ。私のようにね！　そうそう、この間——」

ダンナ様と出会つてから、結婚・妊娠・出産・就職、と瞬間に人生のイベントをこなした京子が言うと、説得力がある。

そこからはいつものように京子のノロケ話に付き合つて、昼の休憩時間が終わった。

* * *

私の合コンへの出席率が高い。というか、残業がなければなにかあつても参加している。派手な見た目から、男漁りだと揶揄されることも多々あるけれど、本当の目的は違ふのだ。

「今月は靴を買つてしまつたから……これ以上財布の紐は緩められないわ」

財布の中身を思い出し、より一層の節約に努める決意をする。

——そう、私は食費の節約のために、飲み食い自由な合コンへ参加しているのだ。

しかし、派手な見た目のせいで軽い女だと判断され、気軽に体の関係を求められる。

もちろん私はきつぱりと断る。そうすると、誰にでも股を開く女のくせに生意氣だと

か……罵詈雑言を浴びせられることになるのだ。

だから、男は嫌なのよ。

幼い頃から派手系の大人びた顔立ちをしていた私は、色々な年齢の男性から褒め言葉や——ときには卑猥な言葉をかけられ続け……私は、男に触れられるだけでトリハダが立つほど、男というものが嫌いになった。

嫌いよ。どうせ私の体目当てでしょ。

嫌いよ。どうせ私はアクセサリーでしょ。

私の外見にしか興味のない男なんて——大嫌い。

それは今になつても変わらない。

今夜の合コン相手は、同じビル内の会社に勤める将来有望な粒ぞろいのエリートらしい。こちらの女性陣は数日前から、今日のために着る服の話できゃあきゃあ盛り上がりがつていた。人数は確か、五対五、だつたかしら？

私はなるべく目立たないよう、普段通り地味な服を着ていくけれど。

終業間際から浮き足立つた空気が漂い、時間になった途端、女性陣はそそくさと席を離れてロッカールームへ向かう。うーん、仕事もそのくらいキツチリやればいいのに。

モヤモヤしながら、私はなんとか仕事を終わらせ、ロッカールームへと向かった。

彼女たちはお互いの服を褒め合いながら、メイクと髪を整えていた。みんないわゆるイマドキのファッションで身を固めている。

いいなあ。ちょっとだけ……ちょっとだけ、憧れはあるんだよね。でも、私がああいう系の服を着ると、どうしても夜のお仕事をしているように見えるらしく、街中を歩くとその手のスカウトがしつこくてすごく嫌な思いをする。

しかし、私だってたまにはオシャレをしたい。だから、今日はこの間奮発して買った七センチのハイヒールを履いてきた。アーモンドトゥのカーブに一目惚れして、二ヶ月悩んだ末に手に入れたものだ。

さらに、とっておきのイヤリングもつけてきた。初任給で買った、雫の形をした重色のイヤリング。私の好きな色で、耳元で揺れるととても綺麗なのだ。安価とは言えない値段だったけど、長く使うから！と、思い切って買った宝物。

普段、就業後は髪を解く^{ほど}のだけど、今日はふたたびキッチリと一本に縛り直して、カーディガンを羽織る。

雨が降りそうだから折りたたみ傘を持って行こうかと迷っていたら、後ろから声をかけられた。

「蒔山先輩」

「なあに？」

振り返ると、今日参加する城之内さんを始め、四人の女の子たちが私の傍に集まっていた。視線が私に集中している。

「くれぐれも、よろしくお願いします」

「わかってるわ。そんなに警戒しなくても大丈夫よ」

「ええ、大丈夫だと思えますけど、一応」

いかにも守ってあげたい女子、といった見た目の城之内さんは、私に対して敵意むき出した。そんなに心配しなくても、私は彼氏を作る気はないし、そもそも彼女は可愛いんだから堂々としていれば、合コンに参加しなくても彼氏くらいすぐできると思うけど。

直前に念押しされるのもいつものことだけれど、そんなに信用されていないのかと思うと、少しだけ悲しくなる。

* * *

金曜の夜ともなれば、繁華街は人で賑わう。その間を縫って城之内さんたちとお店へ入ると、すでに先方は全員揃っていた。個室風に区切られたテーブルは、なかなか雰囲気が良い。お店の選び方一つでも幹事の腕がわかるというもの。本当に高橋さんは上手

いなあ、と感心してしまう。

簡単な自己紹介から始まった台コンは、最初はやはり私へのアプローチが多かった。でもつれない態度を貫いていると、次第に他の女の子に狙いを定め始め、席は賑やかな雰囲気にも包まれた。しかし、その賑やかな中でとり残されたように静かな一角がある。——言わずもがな、端に座る私と、そして私の向かいに座っている男性の一角だ。

彼は人数合わせなのかわからないけれど、男性陣の中で一人だけ毛色が違う。

どう見ても場違いよね……と、隣に座っていた城之内さんが、他の女の子にこっそり囁いているのが聞こえた。

他の男性は、ピシッとスーツを着こなし、顔も平均以上で話し上手だ。

しかし、その人物は、どこか人を寄せつけない雰囲気を出している。しかも、時折じろりと相手を値踏みするような視線を向けてくるから、どうもうす気味悪い。

「夏賀陽平、三十二歳」

自己紹介のときも名前と年齢を言っただけ。そのあとは並べられた料理に黙々と手を伸ばす。まさに取りつく島もない、といった態度。そんな彼の態度に男性陣は苦笑いを浮かべるだけで、特にそれを咎める様子は見られない。やはり彼は人数合わせで呼ばれたのだろう。

後輩女子たちは、そんな得体のしれない男は御免だとばかりに、他の四人の男性と楽

しげに会話を始めた。向かい合って五対五——の中、テーブルの端に座る私と夏賀さんは、ひたすら食事に専念した。

時間が経つうちに、自分の悪いくせが徐々に出てくる。店員が片付けやすいよう、テーブルの真ん中の空いた皿を端に寄せたり、空のグラスをまとめてみたり、こそこそと動いてしまう。

酔いがまわってくる時間だから、私の行動を見ている人などいないと思うけれど。

『見た目は思いつきり夜の女なのに、中身はただの世話焼きオカンよね』と京子に言われたことがあるけれど、確かに自分でもそう思う。頭の中で居酒屋の豆腐の値段と、スーパーの豆腐の値段を比較してしまうのは、完全に家計を預かっている主婦の目線だ。

あらかた料理を食べ終え、お酒もいい感じでまわり始めた頃、ようやく夏賀という人物が気になってきた。いったいこの人はどんな人なんだろう？

正面に座っているのに、チラリともこちらへ視線をよこさない。いままで異性同性関係なく、無遠慮にじろじろ見られることはあったが、ここまで完璧に無視されたことはない。だから、彼に少しでも興味を持ったのだ。

髪はボサボサ、顔はそこそこ……かな？ 顔の造形は、冷たく光る銀縁眼鏡の印象が強すぎてあまり記憶に残らない。しいて言えば、クラスに一人はいそうな学級委員長長

イブ。くたびれた感のある安物のスーツは、肩幅が合っていないのか、どこか野暮ったく見えるし……

「ただ、箸の使い方が綺麗なよね。彼のそんなちよつとした所作に違和感を覚える。そんな彼の行動を観察しているうちに、店を出る時間になった。みんなが入り口に向かったあと、私は「いまだ！」とばかりにササッとテーブルの上を見苦しくない程度に片付け、満足して一歩踏み出したつもりが……ウツカリ足を滑らせてしまった。」

「い………たっ！」

いつの間にか降り出していた雨を、外からやってきた客が運んできたらしい。そのせいで、足を取られてしまった。慣れていないハイヒールを履いてきたのが敗因か。とっさにテーブルに手をついたものの、左足を捻ったらしく、痛みがずぐんと響く。

こ、個室でよかった。

誰にも気づかれずにホツとした。けれど、い、痛すぎる……。どうしよう……

「ほすん、と椅子に腰を下ろして途方に暮れる。早く外に出ないと不審に思われるわよね。かといって、いま無理して出て行ったとしても、楽しい雰囲気壊してしまいうさだし——」

さて、どうやってこの場面を切り抜けようか。

じくじくと痛む足首を恨めしく見下ろしながら考えていると、「蒔山さん、あの……」

と控えめな声をかけられた。痛みを堪えて、なるべく普通の顔をして振り返ると、そこには夏賀さんがあたりをキョロキョロ見回しながら立っていた。

「トイレ行ってたんですけど、もうみんな外に出たんですか？」

あ、なんだ。一応名前は覚えていたんだ。

「はい。これから二次会に行くみたいですよ」

「あなたも行かれますか？」

「いいえ、私はこれから用事があるので、すぐに帰ります」

「用事なんてないんだけどね。一応そう言っておかないと、送り狼と化する人が多かったの、次の予定があると匂わせておくに限る。しかし夏賀さんは、ほそっと呟いた。」

「その方がよろしいかと」

「え……」

ハツと夏賀さんの顔を見ると、私の『左足』に鋭い視線が向けられている。

「あの……さつき、見てしまったんです。足、大丈夫ですか？」

「や、やだ！ 見てたの!？」

「おつちよこちよいな場面を見られてしまったかと思うと、恥ずかしくて顔が火照った。頬を両手で押さえて思わず俯くと、夏賀さんはまるで悪戯を思いついたような口調で私に囁く。」

「今日の予定はキャンセルして、治療に専念した方がいいですよ」

それはどういう意味？ 顔を上げると、眼鏡越しの目が細くなった。

「二次会断るなら、口実を作るの手伝いますよ。俺なら安全パイだと思われていますからね」

夏賀さんは、にや、と口角を歪めて、皮肉な笑みを浮かべた。

いったいどういう意味なのか測りかねていると、ボサボサの髪をガリガリと掻いて、私の耳元に口を寄せる。

「——で、——というふうには。ほら、来ましたよ、上手いことやって下さいね」

ヒラヒラと手を振った夏賀さんは、テーブルに突っ伏した。

「蒔山さん？ あ、いたいた！ どうしたんですか？ なかなか来ないから、みんな心配しちゃって」

「え、ええ……えーと、夏賀さんが酔い潰れてしまったみたいで……」

夏賀さんの言うとおりに伝えると、城之内さんはあからさまにホッとした顔をした。

「よかったー。その人なんかキモいし、二次会どうやって撒こうかと思ってたのよね。——あ、大丈夫ですう。夏賀さん酔い潰れちゃったらしくって」

悪気なさそうに毒を吐いた彼女は、あとから来た男性陣へ向かって、まるで人が変わったような口調で状況を伝えた。彼らは、「おい、どうする」などと言い合っていたけれど、

送ると名乗りをあげる者はいなかった。

「あの、私、用事あるので帰りますね。夏賀さんには、私がタクシーを呼んでおきますから。どうぞ次に行って下さい」

「え……二次会行かないの、ですか……そうですか……」

残念そうな男性に、後輩女子はこそっと囁いた。

——きっと蒔山さんには、『パパ』とかそういうオトナのお付き合いがあるんですよ。だから私たちと遊びましょ？

だから、聞こえてるんだってば！

イラッとしながらも聞こえないふりをしていると、男性陣はどうやら諦めたらしい。

——そうだな、じゃあ、次行くか。

——ね、早く早く！
さりげなく男性の腕に手を絡ませた城之内さんは、「じゃあ先輩、お先ですー！」と、サッサと店を出て行った。肉食女子……怖いわ……

やれやれ、と胸を撫で下ろしていると、寝た振りをしていた夏賀さんが、むくつき起き上がった。

「行きましたか」

「はい、ありがとうございます。では私も帰りますね」

今日はスムーズに解放されたので助かった。お礼を言って帰ろうと立ち上がった瞬間――

「……った!」

ずきいん! と、刺すような痛みが襲った。

あ、あ……そうだった、足を捻ひねったんだわ……

力が入らず、ガクツとふたたび倒れこむように座りこんでしまった。これでは、電車で帰宅するどころか駅まで歩けるかどうかすら怪しい。

じくじくと痛む足をさすってみても痛みは治まらない。どうやって帰ろうかと考えを巡らせていると、いつの間にか傍に寄ってきた夏賀さんが、「ちよつと見せてください」と、私の足をひよいと持ち上げた。そしてハイヒールを脱がし、足首を見始める。

「や……! ちよつと、足! 足!」

一日中履きっぱなしのハイヒールを脱がされて、足首を持たれるなんて、なにそれ? 罰ゲーム?

気になるじゃないのよ、ほら、足のおいととか、臭いととか、ニオイとか……!

どんなにジタバタしても、夏賀さんは知らん顔をして私の足首を眺めている。

「ここを触るとどうですか?」

「いつ、た!」

「こっちは?」

「ん……い、イタ……」

「ま、軽い捻挫ねんざですね。すぐ冷やせば大丈夫そうですね……」

しかし、この店にこれ以上居座るわけにもいかない。けれど夏賀さんは私の足を持つたまま、「うーん」と考えこんでいる。

が、私としては早くその手を離して欲しいのだ。

「あ、あの! 足……」

「ん?」

「離して下さい。汚いですから」

「ああ、失礼。一応触る前におしほりで手は拭いたのですが」

「違います、汚いのは私の足ですよ」

「汚い? 綺麗じゃないですか。お気になさらずに」
夏賀さんはにっこりと笑って、ようやく足を解放してくれた。

思ったより愛想がいいのね。笑うと目がちよつと垂たれて、可愛く見える。

「とりあえず、店を出しましょうか」

「ええ……すみません、ちよつと肩を借りても?」

「もちろん。さあ、体重をこちらに預けて」

夏賀さんの肩を借り、店の外に出る。
しかし思った以上に雨が強く降っていて、大きな雨粒がざああつと路面に音を立てていた。

電車は……と思ったけれど、ここから駅までは十五分。痛めた足で雨の中を歩くのはキツイ。

仕方なく、店の軒先でタクシー会社に電話してみたものの、急な大雨のせいで呼び出しが殺到し、こちらに来るまで二時間かかると言われてしまった。

けれど、そもそも自宅は電車で五駅先だ。自宅までタクシーで帰ったら、とんでもない料金になる。そのうえこの痛みの中、待っているのもしんどい。

「俺の家はこの近くですが、蒔山さんはどちらですか？」

「えーと……電車で帰らなければならないのですが……この足ですし、今日はホテルに泊まるうと思います」

ここから濡れずに行けるビジネスホテルがあることを思い出した。そこに泊まるならタクシー代と変わらない。そう判断した私は、空室があるかどうか電話を試みる。

「どうでした？」

「一部屋だけ空いてました。間に合ってよかったです」

じゃあ、と挨拶をしようとしたら、夏賀さんは「行きましようか」とふたたび私の体

を支えた。

「あ、あの！ 一人で大丈夫ですから！」

「お一人で歩くの大変でしょう？ それに、手当てはどうするおつもりですか？ 俺、この辺りに住んでいるから、夜遅くまでやっている薬局知ってます。そこで色々買ってきますよ」

「でも、そこまでしていただくの、申し訳ないですから……」

もし、下心のある親切だったら――

過去の経験を踏まえると、過剰すぎるくらい警戒するのがちよよいい、と学んでいる。下手に親切を受け入れて自ら不幸を招き入れるのはアホのすることだよ、と京子から説教されたこともあるので、彼のその申し出に胡散臭さを感じてしまったのだ。

すると彼は、ふ、と笑ってスマホを操作し、メール画面を私に見せた。そこには、今日の幹事――高橋さんからの受信メールが映し出されていた。

『今日の参加者の中に蒔山さんという人がいますけど、くれぐれも手を出さないようお願いします！』

「高橋から個人的に念押しされていますし、そもそも俺はあなたのようなタイプは苦手なんです。……これでも安心してもらえませんか？」

完全に安心することはできなかつたけれど、ズバリ苦手だと言われて少しだけホッと

する。とにかくいまは早く休みたかった。

「じゃあ……お言葉に甘えて……」

おずおずと言うと、お気になさらず、という紳士的な言葉が返ってきた。そして私の肩を支えて、痛めた左足に力がかからないように気を配ってくれる。おかげで無事ホテルまで辿り着けた。

ロビーは一夜の宿を求めて、フロントに直接尋ねている人が列をなし、そこそこの賑わいをみせていた。その中に入り、チェックインを済ませる。

私は身の安全を考えて、エレベーターの前で「あの、ここで……」と言ったけど、彼はまるでとりあってくれない。

二人でエレベーターに乗りこみ、目的の階に着くと、彼は「じゃあ俺は湿布を買ってきますから」とエレベーター内に留まった。

それを見て、あれ？ と肩透かしを食らった気分になる。

ひよっとしたら本当に心からの親切で来てくれたのかも。そうだったら、疑って悪いことしちやっとな。

夏賀さんはボタンを押して、閉まりかかったエレベーターの扉をもう一度開けた。

「蒔山さん、いいですか？ 誰が来ても部屋のドアは開けないようにしてくださいね」私の身の安全まで気を配ってくれて……なんだ、いい人じゃない。

「はい、ありがとうございます」

そして扉は閉まり、エレベーター上部にある数字の点灯が、低い数字へと移って行った。それを見届けたあと、私は部屋に向かう――

が、床に足をつくたび、じんじんと痛んでなかなか進めない。

やはり支えがあるのとないのでは、負担が全く違うと実感した。本当に、ここまで送ってもらったのはありがたかった。あとでもう一度お礼を言おう。

半ば涙目になりながらようやく部屋の前に着き、カードキーで開錠する。

中に入って照明スイッチを押すと、部屋の全貌が見えた。一般的なビジネスホテルといった感じだが、ベッドはダブルベッド。

突然の宿泊だったので、この部屋しか残っていなかったのだ。けれど、値段はそれほど変わらなかったのだから仕方なくこの部屋に決めた。

たまには手足を広げてゆったりと寝るのも悪くない。そう自分に言い聞かせ、とりあえず靴とストッキングを脱いだ。これだけでも解放された気分になって、気持ちがいい。備えつけのスリッパに履き替えて、ようやく一安心し、ベッドにゆっくりと腰かける。

思わぬ出費だけど、仕方ないわ。

突然の宿泊だったから、お泊まりグッズなどは持っていなかったけれど、このホテルでは、受付時に言えば、メイク落とし、洗顔、化粧水、乳液などのアメニティーグ

ズをもらえるので、ありがたく頂戴した。下着の替えはないけれど、一晩くらい我慢しよう。

明日帰ったら……休日は、常備菜などを作り溜めするから、食材の買い出しに行かなければ。しかしこの足で重いものを運ぶとなると、ちょっと辛い。

そこで、スマホを取り出して、ネットスーパーで注文をする。ネギと、人参、大根、キュウリ……それから、と……

スーパーの値段とそれほど変わりなく、しかも送料もそこまで高くないので、風邪を引いたときなど大助かりなのだ。せっかくだからと、米などの重い物も注文し、最後に確認メールをチェックする。

それから、ぴよんぴよんと片足で飛び跳ねながらバスルームに行き、歯を磨く。

部屋に入って安心したのか、眠くなってきたので、夏賀さんが来るまでなんとか起きているためにも歯磨きをして眠気を取り払おうと思ったのだ。

しかし、睡魔は容赦なく近寄ってきて、ベッドに座ったらあつという間に夢の世界へと旅立ちそうだ。なんとか片足で歯磨きを終え、うがいをして……さて、どうしようか。眠い……けど、寝られない……夏賀さんが……来るもの……睡魔に必死に耐え、耐え……

——コンコン、と控えめな音に、ハッと顔を上げる。うう、危ない。いままさに寝てしまふところだった。

「はい」

「夏賀です」

ドアを開錠すると、夏賀さんはニツコリと笑って、レジ袋を目の前に掲げた。

「お待たせしてすみません。冷湿布と氷を買ってきました」

「わあ、ありがとうございます！ ええっと、いまお金を……」

私は眠気でぼんやりしていたんだと思う。

気が緩んでいて、まさかの事態を想定できなかった。

「お代は結構ですよ」

「いえ、あの——キャッ！」

ドアを押し開け、ずいっと部屋の中に入ってきた夏賀さんが私を一瞥した。

「チェーンもかけずに不用心ですね。せっかく忠告したのに」

「な……なにを……」

彼の突然の豹変ひょうへんぶりに、思考がついて行かない。いま、私の目の前にいるのは、先ほどまでの野暮ひよぼったい男ではなかった。ギラギラした雄オスの瞳で、私を見下ろしている。

「誰が来ても部屋のドアは開けないように」って、俺、言いましたか？」

「言……ってまし、た……けど」

「誰が来ても、ですよ？ 俺も含めてね」

ククク、と含み笑いを零し、夏賀さんは後ろ手にドアを閉め——鍵をかけた。カチャ、という音が、外の世界との隔絶を知らしめる。

「噂では、かなり男関係が派手らしいじゃないですか。だから、俺もちょっと遊んでもらおうかと思ってます」

棒立ちのまま動けない私に向かって、ゆっくりと夏賀さんは歩み寄ってくる。

一歩、一歩、近づかれるたびに、どん、どん、という音が頭に響く。いや、これは彼の足音ではない。私の心臓の跳ねる音だ——！

男性と二人きりにならないよう、いままでずっと気をつけていたのに……

密室にいたるのは、親切の仮面をかぶった地味な男と、疲れや眠気で警戒心が緩んでしまった私だけだ。あとずさりしようとして、痛めた左足に体重をかけてしまう。その途端ガクツと力が抜けて、よろめいた。

「おっと、もう抱いて欲しいのですか？　気が早いですね」

倒れそうになった私の手首と腰を捕えた彼は、ぐいっと私の体を強引に抱き寄せた。

思った以上に強い力で手首を掴まれ、悲鳴を上げる。

「痛……っ！」

「今日だって、男漁りに来たんでしょ？　残念ですね、足を怪我したせいで狩りにいけなくて」

あまりの恐怖で、思考が追いついていかない。掴まれていない方の手で夏賀さんの胸を押すけれど、逆にその手も取られてしまい、一纏めにされてしまった。

「男漁りだなんて！　す、するわけないでしょう!？」

「かねがね噂は聞いています。それにこの容姿だ。入れ食い状態なのわかります」

「入れ食い、ですって?」

「ええ。貞操観念の緩いお方らしいですね。俺としては大変都合がいい」

入れ食い？　貞操観念？

目を白黒させていたら、壁に背中を押しつけられ、顎を掴まれた。唇に吐息がかかるほど顔を近づけられ、体温すら感じる距離に恐怖を感じて慄く。

「離して！」

「俺、あなたのような軽い女は嫌いですけれど、後腐れのないところは好きですよ」

「いったい、どういう意味な——んっ！」

なんとか逃れようともがいていたら、顎を上げられ、唇を塞がれた。

「ん、んー!!」

口の中が生温かい感触でいっぱいになる。痛みを堪えて、足をバタつかせていたら、逆に足と足の間に膝を押しこまれ、身動きできなくなってしまう。

離して、やめて、と叫びたいのに、口を塞がれていては声を上げられない。呼吸す

らままならず、わずかに唇を開いて酸素を求めたら——突然、口元を解放され、ぬる、とした塊が啞内に押し入ってきた。

「……っ！」

舌先をつついて絡めてくる。混乱する私の目の前には、情欲を燃え上がらせた目をした男がいた。その瞳に、私の奥底に眠るなにかが刺激され、ぞく、と背中が震える。ちゅ、ちゅ、と粘ついた音が繋がった箇所から聞こえてきた。

夏賀さんの舌は、しばらくの間、私の啞内をくすぐっていたけれど、私が応えないことに焦れたらしい。彼はようやく顔を離した。

「応えないのは、俺の技量を確かめようってことですか？」

「ちが……、私は……」

ようやく解放されて、荒く呼吸を繰り返す私に、夏賀さんは口をへの字に曲げて不満を表す。

「違う？ 事が済んだらすぐ帰りますから、気持ちいいことしましょう」

「や、あ……っ！」

怖くて、逃げ出したくて堪らなかった。しかし——それとは裏腹に、いままで感じたことのない、切ない疼きが体の奥底を駆け巡る。嫌なはずなのに、いったい私はどうしたのだろう。身動きすれば、自分のものとは違う『男』の匂いが鼻孔をくすぐり、クラ

クラする。心と体の相反する反応に、涙がじわりと浮かんできた。

夏賀さんは私が消極的なことを『試している』と勝手に解釈したらしく、ふたたび私の唇を舐り、何度も何度も角度を変えて、ちゅうつと音を立てて吸う。

霞む意識の中、ふと視線を後ろにやれば、そこには鏡があり、キスをされている自分と目が合ってしまった。

うっとり目を潤ませ、頬を上気させ、ぼつてりと唇を腫らした……いやらしい顔をした女が、こちらを見ている。

誰、誰？ 誰この女！ 私だけど、私じゃない！

そんな自分を見たくなくて、ぎゅうつと目を瞑る。夏賀さんはひよいいと私を抱えてベッドの上に押し倒すと、私の上に跨った。そして私の両手を、バンザイさせるかのように頭上に縫い止める。シーツの冷たさを感じて、肌がゾクツと粟立った。

「蒔山さん、俺の攻めでいいんですか？ 女に襲われるって感じも捨てがたいんですけど」

その言葉の意味がわからない。それよりも、つまりこの状態って……

「嫌！」

「わかりました。あくまでも俺にっつてことですね。……マグロ、めんどくせえな」

「そ、そうじゃなくて！」

嫌なのは、いまのこの状況なの！ ていうか、マグロってなに!?

小さく呟かれた『めんどくせえ』がいったいなにを意味しているのかわからない。しかも、危機的状況はなに一つ改善されないままだ。なんとかして逃げ出したいのに、悲鳴を上げようと口を開けばふたたび深いキスをされ、足をバタつかせれば押さえこまれる。

「眼鏡、邪魔だな」

夏賀さんはかけていた銀縁眼鏡を外し、ナイトテーブルに置いた。そして、捕獲した獲物をゆっくりと喰らおうとする獣のように私を見下ろし、節くれだった手でボサボサの髪をザツと後ろに掻き上げる。

私は、組み敷かれた状態だというのに、夏賀さんの顔から目が離せなくなった。初めて見たときから顔の造形はそれなりに整っているとは思っていたけれど、眼鏡の印象が強くて、そちらにはかり気を取られていた。

が、その顔立ちは整っている程度ではなく、『非常に』整っていたのだ。

しかも王者の風格、といったものまで感じられる。

間接照明の温かみのある色が夏賀さんの顔を彩り、えもいわれぬ色気を纏わせていた。「……見んなよ、目え閉じてろ」

あ、なんだか素の台詞だ。こんな状況なのに、仮面を外した男の言葉を聞いて、思わ

ずドキツとしてしまう。

いやいや、こいつは私をいいようにしようとしている悪いヤツなのよ!？ 悠長なことを考えている場合じゃないでしょ!

ブンブンと激しく首を振っていたら、「つたく、見てるだけなら、大人しくしてろよ」と、またもあらぬ誤解をされてしまい、私は絶望した。

それでもふたたび抗議の声を上げようとした瞬間、またも唇を塞がれ、「んー! んー!」と籠った声を上げる。

「下手だって言いたい? 俺……それなりに経験あるんだけど。評価厳しいな」

ちよつと! 勝手に解釈して怒らないでよ!

これは、どういうこと? どういう——。考えようとしても、思考が形になる前に霧散してしまう。

「ふ、あ……!」

夏賀さんは重ねていた唇を、つうつと私の首筋へと滑らせていった。そしてくすぐるように舌先でチロチロと舐める。思わず喉の奥から声が漏れた。

私、おかしいよ……首を舐められているのに、こんなっ……やだ……!

夏賀さんは左手で私の両手首を掴んだまま、右手で私のブラウスのボタンを外していく。前がはだけられ、キャミソールとブラジャーが露わになる。

「や、めて……」
 「ふうん。早くしろって？　せつかちなあ。せつかくいい体してるんだから、もっと
 楽しませろよ」

そう言うと、夏賀さんはキャミソールの裾をザツと捲り上げた。

「ひゃっ！」

ブラジャーが、熱い視線に晒される。男性に見られたことなんて……医者に診察され
 たときくらいしかなかったのに……。あまりの羞恥に唇を噛みしめる。

ホックを外され、ブラジャーを取り払われ、とうとう乳房が曝け出された。隠したい
 けれど、両手を掴まれているのでどうしようもできない。

「綺麗だ」

夏賀さんは、私の胸を下から掌で包み、それでも収まり切らない膨らみの上部へ、唇
 を押しつけた。チリツとした痛みが走り、虫刺されとは到底思えない跡が赤く刻まれる。

「や……、跡、つけちゃ……」

「他の男に嫉妬させるのもいいだろ」

他にも、私は男性経験がないの！

やわやわと、乳房の柔らかさを確かめるように揉まれ、「ふあ……っ」と声が漏れる。
 人に触られると、こんな刺激を感じるものなの？

「蒔山さんってカップいくつ？　こんな細いのに、結構ポリウムあるね」

そう言いながら、夏賀さんは膨らみの頂点を指先でくにくにと転がす。

「ああっ！　や、やあ、ああ！」

「経験積んでるのに敏感なんだ。悪くないね」

まるで意志を持ったかのようにツンと固く尖った粒は、転がされたり潰されたりする
 ことで、私にはしたくない声を上げさせる。びくん、と体が跳ね、すべての神経がそこに
 集中し、過剰なほどに反応してしまう。ふいに首の辺りにくすぐったい感触がしたかと
 思うと、温かくぬめるなにかが、乳房に触れる。そして薄く色づいた粒ごと——彼の口
 に含まれた。

「んっ、あ……」

私の胸に顔を寄せた夏賀さんは、舌を使って、それを飴玉みたいに唾内でコロコロと
 転がす。そのたびに、私の体は面白いように震えた。

ちゅうっと吸われて離されたそれは、てらてらと淫らに濡れて光っていた。

その姿が目に入り、羞恥に身悶える。嫌なのに……嫌なはずなのに、反応してしまう。
 自分の体は、どうなってしまったのだろう。正体のわからない感情が出口を求めて渦巻
 いていた。

そもそも、男性とは、普段の会話ですら過剰に距離を取るのに、いま、夏賀さんを拒

否できないのはなぜなのか。

反対の胸も同様に弄ばれて荒く呼吸を繰り返す私を見て、夏賀さんはクスクス笑いながら「演技上手だね」などと言う。冗談じゃない！ いますぐにでも逃げだしたい私を押さえこんでいるのは誰よ！

それよりも、体の奥に燻る熱をなんとかしたくて仕方がない。苦しさは、涙となって毗からぼろぼろと零れ出た。

夏賀さんの手が私の腹をさわさわと撫でる。その手は徐々に下がり、膝まで下りたかと思うと、スカートの裾から内腿へと侵入してきた。くすぐったいのには、気持ちがいいような、泣きたいような、変な気分になり、心の中がざわざわする。

「肌もすべすべ。男に貢がせてエステでも行ってるの？」

「行って……な……」

エステなんて行ったこともない。

男なんて、嫌い。

私自身を見てくれない男なんて、大嫌い。

なのに、なんでこんなに体が疼くのだろう。混乱する思考の中で、認めたくない気持ちが生かたんでは消える。

それは――

「気持ちいい？」

そんな意地悪なこと、聞かないでよ。

それを認めたら、頑なに男性と距離を取ってきた、いままでの私を否定するみたいで嫌だ。

「ここ、湿ってる。素直になれよ」

「……っ、やだあつ！」

ここ、とシヨーツのクロツチ部分を指で擦られて、目の前がチカチカした。湿る？ どうして？

しかしその疑問は、指先で生地を引っ掻かれたことで、吹き飛んでしまった。

「く……ふあ、あ……あつ」
びく、びく、つと強い刺激が全身を貫き、淫らな声上がる。まるで自分の声じゃないみたいだ。

「スタイルや上げる声は俺好みだな。これからも俺と遊んでよ」

シヨーツの横から、夏賀さんの無骨な指が私の秘部へと入りこむ。柔らかなそこを、他人に触れられているかと思うと、羞恥で胸が苦しくなった。

くちくちとした、粘ついた水音が響く。その音が私から発せられているなんて信じたくない。粘液を纏わせて秘裂を上下する指は、滑らかに動き、上部に位置する小さな蕾

を掠める。私は焦れつたさに腰を揺らした。

焦れつたい……？ もっと、触れてもらいたいの？

「そろそろいいよな。——ん？」

ぬっ、と私のナカに異質な物体が押し入る。生理用品すら入れたことない、膣といわれているそこへ！

「やあーっ！ い、たっ……痛いっ！」

「ん、あれ？」

先ほどまでの疼くような感覚と違い、狭いところを無理矢理押し広げる感触に、私はとうとう悲鳴を上げた。

それでも夏賀さんは、内壁の中で指をぐにぐにと動かす。そのたびに私は引きつれるような痛みに襲われ、ぼろぼろと涙を零した。

「——もしかして、処女？」

驚いた目つきで夏賀さんが私を見下ろしている。

「嫌だつて……言ったじゃない！」

「そうか」と頷いた夏賀さんは、私のナカから指を抜き、頭上で纏めていた手首を放して、ベッドから降りる。そしてお湯で濡らしたタオルを持ってきて、私の胸を拭き、次にベトベトになった秘所を拭おうとしてきた。

慌ててタオルを引つ掴み、「あっち向いててー！」と叫んで自分で拭う。

冷静になったいま、ふたたびその場所を他人に触らせるなんてありえないわ！

「悪い。俺、てつきり……」

来る者拒まず、様々な男を渡り歩いていると噂されていたから……夏賀さんはそう言い訳をしたけれど、「でも俺、ドア開けるなよ、つて忠告したよな」と開き直ってみせた。

「どうせ遊んでる女だつて思ったんでしょ。だから嫌なのよ、男つて」

「蒔山さんて……ソッチの人？」

「え？ ……つて、違うわよ!!」

ソッチ、と言われて一瞬首を傾げたが、それが同性愛者かと問われたのだと気づき、思わず怒鳴ってしまった。

「私は、見た目で判断されるのが大嫌いなものよ！ えーえー、そうですよ。この年まで経験がないのも、やる目的ですぐ近づいてくる男が大っ嫌いだからです!!」

乱れた衣服を直しながら、夏賀さんに怒りをぶつける。

ドアを開けた私も不注意だった。けれど、親切な男と思わせておいて襲ってきたのだから、絶対こいつが悪いに決まっている。

「もういいだろ。ちゃんと途中でやめたし」

「途中とか、そういう問題じゃない！」

「つていうか、俺の好みじゃないしな、蒔山さんて」

「は？」

「俺は、もつと……和風の、清楚で可憐で、黒髪ロングの、深窓のお嬢様ってタイプがいいんだ。ま、遊ぶのは、頭軽そうで見目が派手なお前みたいなヤツだけだな。後腐れないし」

「……」

つまり、私は性欲発散のために選ばれたつてわけか。清楚とは対極の派手な顔をしているといっただけで。

「それにさ、好みのタイプだったら絶対処女がいいけど、遊び相手に処女なんて面倒くさいだけだろ」

「面倒くさい？」

そういうえば、さっきもそんなことを言っていたような。マグロがどうか……ん？

「マグロってなに？」

そう尋ねると、夏賀さんは、ぶはっとお腹を抱えて笑い出した。

「ちょ、マジ？ マグロも知らねーの？」

「え、ちょ、どういう意味なの!？」

「なんにもしないで、ただされるがままってこと。まな板の上の鯉ってね。こっちは喘

がせたくて頑張ってるのに、反応ないんじゃないや萎えるよな？」

「萎えるよな、つて私に同意を求めないでよ！」

腹が立って手元にあつた枕を投げつけると、夏賀さんは難なく受け止めた。そして「処女じゃ、マグロの意味を知らなくてもしょうがないね」などと行って、ニヤニヤしながら私を見る。

「だいたい、夏賀さんだつて本性隠してたじゃない。親切な人だと思つたから、信用……したのに」

「だーかーらー。それがお前の処女たるゆえんだな。甘いつつーの。だいたい俺ら、今日会つたばかりだろ？ なに簡単に信用してんだよ。男つてのは、穴があつたら挿れたいもんなの。お前、ほんとに世間知らずだな」

「さっきから、お、お、お前つて！」

お前呼びわりが気に入らず、怒鳴りつけてやろうと思つたら、夏賀さんはベッドにドサツと腰かけて、私の足首をひよいと掴んだ。

「きゃあっ！ なにするの！」

「冷やすんだよ。挫いたんだろ？ ……ちよつと氷、溶けかけてるけど、まあいいか」

そう言つて、私の体を拭いたのとは別のタオルで氷の入つた袋を包み、私の足に乗せた。あ……ひんやりして気持ちがいい。さっきまでのゴタゴタで痛みを忘れていたけれど、

やはり痛いものは痛い。

「そんなひどくないみたいだな、冷やしすぎもよくない。もうちよつとしたら冷湿布に取り替えて」

感謝なんてしたくないけれど、ここは素直に従っておこう。

「お前さ、見た目とずいぶん違うんだな。爪もギリギリまで切ってるし、甘ったるい香水もつけてないし……思ったより地味？」

私の爪の先を指でなぞって、そんなことを口にする。

「お前って呼ばないで。見た目と違うって、なに勝手にガツカリしてるの。私は最初から自分を偽いつはりってなんかいないわ。見た目で判断したの、夏賀さんでしょう」

「見た目と噂かな。見た目、水商売のおねーちゃんみたいだし。合コンには参加するくせに好みの男がいないとすぐ消えるとか、愛人やっていると、散々言われているのに否定しねーだろ」

「……しても無駄なの」

そう、いままで……うんと小さいころから、この濃い顔つきのために誤解され続けてきたのだ。何度となく誤解を解こうとしたが、女性の嫉妬しとねは怖い。尾ひれがついてさらに広がってしまう。仲がいいと思っていた女友達に裏切られたことなど数知れず。だから、もう諦めたというか……

俯うつむいた私の頭を、夏賀さんはぼんぼんと軽く叩いた。

「悪い」

言葉ことばを濁にごした私の気持ちをも、夏賀さんは汲み取ったようだ。あっさり引き下がったので、肩透かしを食った気分だ。

……まあ、遊び相手の女性には深く立ち入らない、という夏賀さんのポリシーが表れているともいえるのか。

確かに、初対面でいきなり襲ってきた相手に話すことでもないわね。というか、なんで私は自分のコンプレックスを夏賀さんに話そうとしているんだろう。不思議に思いながらも、投げやりに呟いた。

「いまさらなに言われても……平気よ」

「慣れるなよ、そこは。だいたい嫌だったら、合コン出なきやいいだろ。なんで出るんだよ？」

「え、と……。せ、節約のため、かな」

「は？ 節約？」

「私が行けば、男性のランクが上がるとかで、食事代免除してくれるんですよ。だから「はあ？ ……お前さ、ばっかじゃねーの」

夏賀さんは私のおでこをピンと指ではじき、立ち上がってスーツのジャケットを脱い

だ。そしてネクタイを外し——

「えっ、あの、あの！ 服、服!!」

処女はめんどくさいから抱かないんじゃないかなかったの!! 安心しきったところでふたたび貞操の危機!!

足の上に氷の入ったタオルを乗せたまま、ズリズリとヘッドボードまで後退する。そんな私に、夏賀さんはしれっと言った。

「もう夜遅いし、ここで寝てく」

「は？」

「ダブルだし、ちょうどいいじゃん」

「ちょうどいいって……え？」

「お前はもう少しし、足冷やしておいた方がいいな。じゃあ俺、風呂先に入るわ」

「えっ、あの、ちよつと……」

「いったいどういうこと？」

目を丸くしている私をよそに、夏賀さんはクローゼットを開けてハンガーにジャケットをかけ、ワイシャツを脱ぎ、ベルトを外し——

「えっち。見んな」

ズボンに手をかけたところで振り返り、そんな言葉を投げつけた。

そ、それは私の台詞でしょ!? そもそも、私、泊まっていたんだなんて言っていない——

「ま、待って！」

手を伸ばして制止の声を上げたが、無情にも風呂場に続くドアは閉まり、カチャッと施錠の音が聞こえた。

——なんなの、あいつ！ なんなの、あいつ！

その言葉を百二十三回唱えたところで、疲れからか、ふつつりと記憶が途切れてしまった。

「おはよう」

「……は？」

寝ぼけ眼に映し出されたのは、けだるげな表情をしているイケメンでした。

——って！

「誰?」

「へー、指の挿入までした俺のこと覚えてな——もごっ」

「そそそれ以上言わないでー！」

慌てて美形の口を手で塞ぐ。思い出した！ 一瞬で思い出しましたとも！

「ど、ど、どうして同衾!! って、やああ舐めないでええっ!」

「同衾で……古式ゆかしいな。そんな言葉があること忘れてたわ」
 掌に生温かいモノがぬるつと触れ、慌てて手を引く。すると夏賀さんは、笑いを噛み殺しながら髪を掻き上げた。

なんだろうこの人は。眼鏡を取ったら美人でした、ならわかるけれど、ダサ男が実はイケメンでした、ってなんなのそれは！

無駄に色気を放つ夏賀さんを直視できず、思わず顔を伏せたら、夏賀さんの下半身が目に飛びこんできた。

「や、やだっ！ ちよ、服、というか……っ」

「だって皺になるだろう？ ……じゃなくて？ ああ、これ朝勃ち。男の生理現象だから気にすんな」

言わないでよ、その単語を！

涙目になって固まる私に、夏賀さんは「お前って面白いな。処女丸出しの言動じゃねーか」とニヤニヤしながらベッドから降りた。そしてズボンとワイシャツを……身に着けてくれているようだ。

ようだっていうのは、もちろん直視なんてできるはずがなく、枕に顔を埋めていたから。そしてなにやら、ペリペリとかカチャツとかピーとか、色々な音が聞こえてきたけれど、顔を上げるタイミングがわからず、とりあえず自分の体の状況を確認することにした。

——うん、特に『アレ』以上のことはされていないようだ。どうやら昨夜の私は、怒りの言葉を脳内で繰り返している間に寝落ちしたらしい。私ってば、案外神経図太いのね。ふいに、コーヒーの香りが漂ってきた。

「おい、飲むか？」

え？ と顔を上げると、そこにはカップを片手に持ち、コーヒーを私に差し出す夏賀さんの姿が。

よかった、もう着替えている。まずそこにホッとし、それから、あれ？ と疑問を持つ。彼が差し出しているのは、使い切りのドリップでカップに注がれたコーヒー。ここに湯沸かし器とカップがあるのは知っていたけど、コーヒーはなかったはずだ。いつの間に用意したんだろう？ 首を傾げる私に気づいた夏賀さんが、自分用に淹れた一杯を口に運びながら答えた。

「熱っ！ ……お前が寝てから、またコンビニ行ってきたんだよ。俺は朝、コーヒーがないと目が覚めないタイプなんだ。お前のはついでに淹れただけ」

くそ、冷めねえな、などと言いながら、夏賀さんは私にカップを手渡した。

「あ、ありがとう」

なんだかんだ言いながらも、私の分のコーヒーを用意してくれた。

そういうえばと自分の足を見れば、綺麗に湿布が貼られており、腫れも痛みもあまり感

じない。昨夜の行為はいただけでないが、根は優しい人なのかもしれないと、複雑な心境に陥る。

「だから、お前って呼ぶのやめて下さい」

なんとなく礼を言う気分になれず、つい別のことを口走った。

「ん？ 大概の女はお前って呼ぶと喜ぶけどな」

「私は、嫌なんです」

自分がその他大勢に含まれる気がするし、軽んじられているようで我慢ならないのだ。そう言うと、コーヒートをふうふうと冷ましていた夏賀さんは「へえ」と感心した声を上げた。

「そう受け取るんだ？ 面白いね、蒔山さんて」

クスクスと笑いながら、ようやくカップに口をつける。

「女って、あなたのモノになりたい、あなたのモノにして、って言いながら俺のこと縛りたがるんだけど。蒔山さんは男になにを望むの？」

「さあ、知りません。興味ありませんし」

いまの私は、色恋に溺れている暇はないのだ。

眼鏡を取った本来の夏賀さんは、女遊びの激しいヤツらしい。普段なら絶対に近づきたくないタイプだ。……足さえ挫かなければ、こんなことにはならなかったのに。

チラッと枕元のデジタル時計を見れば、チェックアウトの時間が近づいていた。

なかなかコーヒートを飲み終わらない夏賀さんをほっといて、私はベッドに腰かけ、足をゆっくりと床に下ろす。

ん、痛みはだいぶ引いたから、歩けそうだ。試しに立ち上がってみても、昨夜ほどひどくはないので、今日と明日ゆっくりすれば、月曜から普段通りに動けるだろう。まだコーヒートを飲んでいる夏賀さんを一瞥し、バッグを持って洗面所に入る。トイレを済まして、洗面所の鏡で自分の顔をチェックする。

鏡の中の私は、相変わらず派手な目鼻立ちをしていた。今日はやけに不機嫌そうだ。メイク落とし、洗顔、化粧水に乳液……と。ファンデーションしか塗っていないなかったとはいえ、メイクしたまま一晩寝てしまったのは痛い。家に帰ったら、化粧水パックしようかなと思いつきながら、顔をよく洗い、化粧水と乳液で整え、唇には軽くグロスだけ塗って洗面所を出る。

夏賀さんは、椅子に腰かけながらスマホを操作していた。私が出てきたので、一瞬間を上げたが、また画面に視線を落とす。

「手際いいんだな。思ってたより早かったよ」

「え？」

「化粧。女って時間かかるだろ？」

「へえ。そのあたりもよくご存じなんですわね」

私はベッドの上も軽く整え、ルームキーを手に持ちながら答えた。

「まあな。待ってる間って暇でさ。だけど暇だって言うのと怒られるし、男にとっちゃ理不尽な時間だよ」

たしかに、基礎化粧品から始めて、あれやこれやと技術を駆使してフルメイク、そして髪を整えたとすれば、人によっては軽く一時間はかかるだろう。

私は生まれつき濃い顔だから、普段のメイクの時間は五分もかからない。髪型だって、もともとの癖毛がゆるふわっぽく見えるパーマ要らずの髪質なので、軽くブラシで整えれば終わりだし。

「それだけ気合い入れているんでしょね。でも、私には関係ないわ」

「必要ない？ お前だってそんな化粧品してるのに」

「いま、私してないわよ」

「は？」

「してないって言ってるの、化粧を。グロスを塗っただけ」

「え……」

夏賀さんは驚いて、目をぱちくりさせる。

「してな……？ は？ だって……」

「もういい？ チェックアウトの時間だから。じゃあね」

部屋の鍵とバッグを持ち、まだコーヒーを飲んでいる夏賀さんを置いて部屋を出る。

二度と会うことはないだろう。扉を閉める直前になにか言っていた気がするけれど、私は気にせずエレベーターを指して歩き出した。

「へー！ 蒔山にしてはやるじゃん」

「やめてよ……」

週明けのお昼休み。

テーブルの向かい側に座っている京子にあの日の出来事を愚痴ると、拍手でもしそうなほどに喜ばれてしまい、私はうんざりして箸を置く。

「その夏賀つて人とホテルに？ へええ、男のお持ち帰りなんて初じゃない？」

京子はニマニマと人の悪い笑みを浮かべながら、お味噌汁を啜る。

今日のお味噌汁の具は、先週、食堂のおばちゃんと言っていたワカメと筍。少しだけ気分は上昇したけれど、あの夜の記憶はそれぐらいで消えない。食欲はないものの、残すのはもったいないし、綺麗に食べたいんだけど……

「ちよ、声！ 声！」

誰が聞いているかわからないから、慌てて京子に注意を促す。京子もいま話すには適

当ではない内容だと気づいたらしく、背中を小さくしてゴメン、と謝った。そして改めて声を潜めて私に話す。

「あの蒔山がね。男なんてフケツよ！ って一切寄せつけなかったのに」

「冗談はやめて。あれは不可抗力だってば。足さえ挫かなかったら即行で帰っていたもの」さすがに『服脱がされて指まで挿れられたのに、処女は面倒くさいと最後まで致さず、ただ同じベッドで寝て帰った』なんてことまでは言えない。

口が裂けても、言えない。一生の不覚だ。黒歴史だ。

足を挫いて、ホテルまでつき添ってもらったけれど、キスされてしまった——と、だいぶ話を削っての愚痴だった。それでも、京子は私にしては飛躍的進歩と捉えたようだ。「でもさ、体支えてもらったんでしょ？ トリハダどうだった？」

そういうえば、夏賀さんに触れられたけれどトリハダは立たなかった……と思う。

京子はそう尋ねると私の返事を聞かずに、最後の一口を食べ、弁当箱を片付けた。私も食欲はないものの、身に染みついたもつたいない精神で残りのご飯を胃袋に押しこむ。そして、お茶を飲みながら、『夏賀さん』というに思い浮かべた。

初対面は、確かに印象が悪かった。ボサボサ髪に安っぽい銀縁眼鏡、体型に合っていない着古してテラテラ光った安物スーツ。自己紹介で名前と年齢を言ったきり一言も言葉を発することなく終始不機嫌そうな表情を浮かべていて、後輩女子たちは「キモい」

とヒソヒソ言い合っていたほど。

しかし、ベッドに押し倒され、眼鏡を外して髪を掻き上げた夏賀さんの色気溢れる表情に、一瞬目を奪われてしまった。これから捕食しようとする肉食獣のように瞳をギラギラさせて——

恐らく後者の姿が、夏賀さんの本性なのだろう。ダサイ銀縁眼鏡のせいで気づかなかつたけれど、一回見れば忘れられないほど整った顔立ち。そして腰が砕けてしまいそうなほどに低い——

「見つけた」

そう、こんな声……えっ!?

弾かれたように振り返ると、そこには例の地味な格好をして、口の端を愉快そうに歪めた夏賀さんが立っていた。

「な……どうしてここに?」

「同じビルだから、会社」

「へっ?」

「お話し中ごめんね? いまいいかな」

目を丸くしている私に、夏賀さんの斜め後ろにいた高橋さんが話しかけてきた。それに気づいた京子が、即座に返事をする。